

彙報

二〇二一年度東洋学講座講演要旨

(「東洋文庫蔵日本古典の絵入り本」)

第五八一回 一月二三日(木)

奈良絵本の楽しみ

——浦島・天神・万寿姫——

東洋文庫研究員 齋藤真麻理
国文学研究資料館教授

本講座は『岩崎文庫貴重書書誌解題VIII——東洋文庫絵本コレクション』(東洋文庫日本研究班編纂、二〇一六年三月)の成果を踏まえ、全三回で構成された企画である。稿者は第一回を担当した。奈良絵本研究の導入ともなることを企図し、国内外の奈良絵本の画像を用いた概説から、「描かれた異境——浦島太郎絵巻」——「挿絵から聞こえる声——『萱家物語』——」「版本との出会い——『唐糸草子』——」の三節に分けて東洋文庫蔵の奈良絵本について講じ、後半は書画カメラを用いて制作実態を伝える原本の実例を紹介し、今後の研究展望を述べた。

奈良絵本とは室町時代後期から江戸時代前期頃に流行し

た絵入り本をさすが、呼称は明治時代の造語である。初出は明治四十二年(一九〇九)九月の『集古会誌』で同年『文芸百科全書』にも見える。集古会は学者や好事家、書肆など近代の趣味人が会員として集い、「談笑娯楽の間に考古に關する器物及書画等を蒐集展覽し互に其知識を公刊するを以て目的と」した活動であり、奈良絵本の呼称はこうした交流の中から生まれた。作例には物語・軍記・和歌・芸能など多様な文芸作品のほか、明代日用類書までも含まれ、とくに室町物語(御伽草子)が多い。しかし、大半は作者や絵師、発注者が判明していない。恐らく、豪華本は大名家周辺、京都で制作されたものが多かったであろう。

東洋文庫は二〇点ほどの奈良絵本を所蔵する。奈良絵本の歴史を辿り、制作の場を推測する上でも貴重なコレクションである。黎明期の作例としては江戸時代初期の大型の縦型奈良絵本『たまも』が目される。これと同一装訂で、挿絵の雰囲気も似通う美麗な奈良絵本が四点所蔵される(「むらまつ」「しぐれ」「しだ」「まむぢう」)。室町物語や幸若など、ジャンルを異にする文芸が豪華な揃い本として制作された証左である。

奈良絵本全盛期にあたる江戸時代前期の作例では、豪華絵巻『浦島太郎物語』や典型的な横型奈良絵本『萱家物語』『唐糸草子』等が興味深い。『浦島太郎物語』の物語は諸本

に同じいが、前半部分、浦島が龍宮に到着した場面には他にほぼ見えない一図を含む。日本風の屋内に座す老夫婦、浦島、そして左手を伸ばして彼に話しかける異国風の貴女が描かれ、先行研究は「龍宮の中で亀が自らの親夫婦と浦島を対面させた場面か」と見るが、別に想起されるのは、物語の設定が似通い、図様が近似する渋川版「蛤の草紙」である。新しい物語の絵画表現を「浦島太郎物語」が取り込んだ可能性も一考の余地がある。肝要なのは諸本間の比較のみによる議論ではなく、奈良絵本制作の場にどのような物語解釈を可能とする「環境」があったのか、文学生成の圏域・解釈圏域の問題として追究することである。なお、本絵巻は浦島が玉手箱を開ける場面はなく、鶴と亀を描き添えた浦島明神社の風景で終わり、高い祝言性が看取される。

奈良絵本の魅力は豊かな画中詞にも看取される。その好例として菅原道真の伝記『菅家物語』から内裏炎上の挿絵を精読した。画中詞には天神の物語にふさわしく能「老松」の詞章が取り込まれ、また、俗語を交えて賑やかな雑談が活写される。時代性を反映しつつ、物語世界を増幅させる挿絵の機能が存分に發揮された佳作である。『唐糸草子』に目を向ければ、主人公の姫の名が「万寿」であることも見逃せない。実際、女性芸能者の名にはしばしば「寿」が冠

されており、本作は姫の舞の徳を称える物語にふさわしい名が選ばれたのであった。その力によって、母の唐糸は主君頼朝の命を狙ったにも拘わらず救出され、物語は大団円を迎える。総じて室町物語は決定的な下剋上を語らず、秩序回復を言祝ぐ側面を有している。それは本来、奈良絵本が帯びていた祝言性とも通じていよう。本作はその端的な一例ともいえ、さらには丹緑本と本文・挿絵ともに酷似することから、版本に基づいて作られた奈良絵本としても注意される。

以上を講じたのち、書画カメラで複数の奈良絵本を投影し、制作の一面を瞥見した。『浦島太郎物語』の絵画表現、『たまも』と『むらまつ』の近似を見た後、江戸時代前期の『釈迦の本地』『まつらさよひめ』を取り上げた。前者の挿絵には色指定の痕跡、後者の挿絵ウラには墨書「うはかは」が確認され、工房における分担作業や、別作品の挿絵が転用される実態が浮かび上がった。しかも「うはかは」の伝本は極めて少ない。東洋文庫の奈良絵本はさまざまに意義深い作品群なのである。

今後の研究展望としては、詞書や挿絵はもとより、顔料の分析などが期待される。表紙裏反故も貴重な研究資源となり得よう。時にそこには稀覯書や、奈良絵本の工房の「環境」を物語る反故が用いられているからだ。現在は研究者

が偶然に左右されつつ、情報を蓄積している段階だが、これらを網羅的に非破壊で取り出し、表紙裏反故データベスなどを構築できないかと夢想する。

このように中近世日本における絵入り本はいまだ謎に満ち、新たな書物文化の風景が描かれるのを待っているように思われる。

第五八二回 二月三日（木）

絵で読む能——東洋文庫蔵

「観世流絵入謡本」熟覧——

成城大学教授 大谷 節 子

絵入謡本、能絵本、能絵巻と呼ばれるものは、謡と所作（舞）と囃子からなる能の舞、台空間を平面化したものである以上、能の表現を超えることは難しい。しかし、これはあくまで完全形態としての能を中心にした視点である。演能のための相伝本としてではなく、読むための、また調度品としての謡本が作られた室町後期以降の謡本制作史においては、絵入謡本はその最も豪華な発展形として位置付け

ることができる。光悦謡本が版本の豪華謡本の極であるのに対して、紺地に金銀泥表紙を持ち、下絵入り料紙に本文が墨書される絵入謡本は、写本の豪華謡本の極にある。

本講座で取り上げた東洋文庫所蔵の『観世流謡本 六番（絵入）』は、こうした絵入謡本の最も美しい形を今に伝える六冊である。この本の絵の料紙は本文部分とは別の打紙楮紙で、本文の料紙の糊代に貼られて全体は袋綴状に仕立てられており、絵と本文は別々に製作された後、製本されたことが窺われる。袋綴ではないが、神戸女子大学古典芸能研究センター所蔵の絵入謡本十二帖も、同様の工程が想定される。

講座では六冊の内、「三井寺」を熟覧した。この本文は元頼本系統の上掛り系謡本に一致する。この系統の謡本は、所作を伴わずに舞台が再現可能な、謡のための本として整備された特徴を持っている。絵と本文が別の所で製作されたことは先に述べたが、予め絵を入れる箇所を決めた上で本文が書かれたことは、絵へと続く直前の本文が散らし書きになっていることから察し得る。東洋文庫所蔵六冊の内、この「三井寺」のみに節が付されているが、節記号は後筆である。九丁才は前述した散らし書きの箇所であるが、本文の筆者は「かげはさながら」からが「次第」と呼ばれる別の小段であることに配慮せず筆を走らせており、この